

## 2020 年過去問解説

### 問題 1

解答：c

外傷性髄液漏の急性期は保存的治療が原則であり、セミファーラー体位での安静と髄液移行性の良い広域スペクトラム抗生剤の投与を行う。頭蓋内感染予防のため鼻腔パッキング、鼻かみは厳禁である。

### 問題 2

解答：a

上眼窩裂を通る神経は b. c. d. e. である。骨折、血腫、腫瘍などによる上眼窩裂部の障害により、神経障害症状を呈するものを眼窩先端症候群と呼び、これに視神経障害が加わったものを眼窩先端症候群と呼ぶ。

参考文献：Badakere A, Patil-Chhablani P: Orbital Apex Syndrome: A Review. Eye Brain 11:63-72, 2019

### 問題 3

解答：b

頬骨骨折が呈する多彩な症状についての問いである。眼瞼下垂は、上眼窩裂症候群による動眼神経上枝麻痺により生じ得る症状である。頬のしびれや噛んだ感じの違和感は、下眼窩孔におよぶ骨折により三叉神経第 2 枝である上顎神経が損傷することで生じるもので、特に噛んだ感じの違和感は「偽の咬合不全」と呼ばれる。また、頬骨弓部の陥没骨折が側頭筋を圧迫しその弛緩伸展を阻害することで開口障害も生じ得る。本骨折により嗅覚障害を来すことはない。

参考文献：近藤壽郎(訳)：頬骨上顎複合体骨折、頬骨弓骨折，A0 法骨折治療 頭蓋顎顔面骨の内固定：外傷と顎矯正手術(1 版)，下郷和雄(監訳)：209-220，医学書院，東京，2017.

### 問題 4

解答：b

a) 下顎枝矢状分割骨切り術， c) 下顎骨体骨切り術， d) 上顎前方歯槽骨切り術 (上顎分節骨切り術)， e) 下顎枝垂直骨切り術

参考文献：藤本久夫：口腔外科手術マニュアル IV Kole 法と Wassmund-Wunderer 法 歯界展望 70, p407-423, 1987

### 問題 5

解答：d

- a) 手術時期は通常 10 歳から 12 歳とされることが多い。これは若年者では、十分な量の肋軟骨が確保できない可能性が高い事と、軟骨自体が未熟で形態の細工が難しいためである。
- b) 聴力改善手術の適応自体が議論のある所であり、同時手術が必須とは言えない
- c) 術後は外力による再建耳介の破損防止のために一定の期間を保護したほうが良い。
- d) 軟骨の性情は 3 種類に分けられる。硝子軟骨（関節軟骨、肋軟骨、気管軟骨）、弾性軟骨（外耳道軟骨、耳管軟骨、耳介軟骨、喉頭蓋軟骨）、線維軟骨（強さ関節軟骨、恥骨結合軟骨）
- e) d)を参照

参考文献：朝戸裕貴、加我君孝編、小耳症・外耳道閉鎖症に対する機能と形態の再建。pp38-40、金原出版、東京、2009

日本形成外科学会ほか編、形成外科診療ガイドライン 4、頭蓋顎顔面疾患（主に先天性） pp84-89、金原出版、東京、2015

## 問題 6

解答：d

- a) × Crouzon 症候群の発症には FGFR2 遺伝子の変異が関与しており、常染色体優性遺伝を生じる。
- b) × Scaphocephaly は矢状縫合の早期癒合により生じる
- c) × Apert 症候群は、手足の合指・趾症を伴う代表的な症候群性頭蓋縫合早期癒合症である。眼窩は浅く、眼球突出と共に眼窩開離 (hypertelorism) を呈する。
- d) ○ Pfeiffer 症候群は、頭蓋縫合の部位や症状により 3 つの type に分類される。中でも Type 2 では全縫合の早期癒合に伴う Cloverleaf skull syndrome を呈し、水頭症の合併を生じる。
- e) × 頭蓋縫合早期癒合症に対する手術目的の一つに脳の発達障害の予防が挙げられる。脳は生後 1 歳までに急速に発達するため、頭蓋内圧亢進例などでは 1 歳以下の手術が望ましいとされる。

参考文献：Advance Series I-5 頭蓋顎顔面外科 最近の進歩、克誠堂出版、p. 205-231

栗原淳 頭蓋変形・頭蓋縫合早期癒合症 小児内科、51, p. 1553-1557, 2019

## 問題 7

解答：e

総頸動脈から分岐する2本の動脈のうち、前方を走行するのは外頸動脈である。いずれの選択肢も基本的な解剖を述べたものであり、どの教科書にも記載してあるが、頭頸部再建においては重要な知識である。

参考文献：標準解剖学（第1版） p457, 493, 498

#### 問題 8

解答：e

鼻尖形態に関わるのは外側鼻軟骨でなく、大鼻翼軟骨である。他は全て正しい。日本美容外科学会(JSAPS)の主導で、日本美容外科学会(JSAS)および日本美容皮膚科学会(JSAD)の協力を得て、2017年より毎年、1年間に日本で行われた美容医療の施術数調査が行われている。最新の2019年の調査報告（第3回全国美容医療実態調査）では、以下の傾向が見られた。

・2019年の報告では、フェイスリフト37,317例のうち、スレッドリフトが36,163例と、全体の96%以上を占めており、外科的リフトは4%に満たなかった。

・世界的には、顔の手術は4割で、乳房が3割、躯幹・四肢が3割を占める。すなわち、体形に関する美容手術が過半数を占める。しかし、日本では顔の美容手術数が9割近くを占め、乳房と躯幹・四肢はそれぞれ5%程度しかない。すなわち日本人の美容の関心が、極端に顔に偏っていることが示された。

文献：

眼手術学 2眼瞼、文光堂、第一版、8~9ページ

PEPARS No. 105 鼻の美容外科、全日本出版、8~12ページ

第三回全国美容医療実態調査 最終報告書

[https://www.jsaps.com/jsaps\\_explore\\_3.html](https://www.jsaps.com/jsaps_explore_3.html)

#### 問題 9

解答：b

口唇口蓋裂に関する問題である

a) ×：口唇口蓋裂の発生頻度には人種差があり、東洋人>白人>黒人であり、誤り

b) ○：口蓋裂単独発生例は女70%:男30%であり、正解

c) ×：日本人では約500人に1人生まれるので、誤り

d) ×：口唇裂は通常胎生4~7週に形成されるので、誤り

e) ×：口蓋裂を伴った口唇裂の左右別発生頻度では左側が右側の3倍であり、誤り

参考文献：鬼塚卓彌著：形成外科手術書【改訂第5版】実際編②. 77-85、南江堂、東京、2018

問題 10

解答：a

開咬は steep mandible を特徴とし、下顔面高が長く、Gonial angle と下顎下縁平面角が高い値を示す。下顎骨形態を外科的に改善すると、下顔面高、Gonial angle、下顎下縁平面角は減少する。SNB は下顎の counter-clockwise rotation により増加するが、SNA は手術対象ではないので変化しない。

参考文献：Donald Burden, Chris Johnston, David Kennedy, Nigel Harradine, Mike Stevenson. A cephalometric study of Class II malocclusions treated with mandibular surgery. American Journal of Orthodontics and Dentofacial Orthopedics. Volume 131, Issue 1, January 2007, Pages 7.e1-7.e8.